

日馬來ル、其人馬場ニ出テ、猫ノ如キト云シヲ特ミ、何心モナク乗ルト驅出シ、縦横ニ馳廻リ、小土手ヲ踰ヘ立木ニ突當リ、殆ド落ントセシヲ、口付ノ者取押ヘテ漸ニ免レヌ、思ノ外ノコトナリシカバ、ソノ馬早々返シケリ、後日ニ越前對話ノ折カラ、其人慍ヲ含テ云ニハ、曩日猫ノ如キ馬ト申サル、ニヨリ、其心得ナリシニ、扱々思モ依ラヌコトナリシト、其次第ヲ述ケレバ、越前云ニハ、則夫故ニ猫ノ様ナリトハ申ツレ、猫ハ常ニヨクカケ廻リ、柱ヲ攀デ塀ヲ踰ヘ屋根ヘモ登ル者ナリ、其馬ヨク似候ト存候ヒシガ、屋根ヘ登ラヌガヨカリシトノ答ナレバ、其人大ニアキレテ、笑タルマデナリシトナリ、

〔狂歌現在奇人譚三編上〕十返舎一九の傳

一九は東都通油町に住して、氏を重田、名を貞一、別號を十返舎とぞよびける、手跡などきよらにして、畫かくこと妙なり、世に聞え高き膝栗毛の作者なり、此人のあらはしつる書、いにしへよりかぞふれば、二百三十餘部におよぶ、されどことごときをかしく、たはれたる書にて、見る人はらうちかゝへて、ふしまろびわらひてやまず、實に滑稽の長たる人なり、○中さて大つごもりになりけれど、さらにものなければ、かけこひなどのきたりて、せたむるをうるさくおもひて、夕よりそこ爰と、あそびさまよひてありきけるが、○中このとなりの酒屋のあるじき、て、さらば先生をまねき給はれといひける、一九は何にかあらんとて行けるに、○中一九この夜はよすがら酒のみで、いたくうちゑひて、いざゝかへりなんとて、いとまをつげて立いでしが、かたへのぬりごめのまへに、すゑふろの桶ありけるを見て、この桶かし給へといひければ、あるじき、ていとやすきことなりといらふ、一九これをもていでんとするを、あるじとゝめて、こものになはせてまゐらすべしといふを、いなく、かばかりのものもてゆかんに、なでうくるしきことやあるとて、かの桶さかしまにして、打かぶりて出行ける、はやあかつきにちかゝりけれど、大つごもり